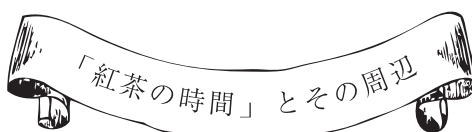


きもちは、 言葉を さがしている



第 29 話

水野 スウ

コッカイオンドクその後

前号28話の最後に、「コッカイオンドク」のことを少し書きました。共謀罪を審議する国会答弁をそのまま書き起こし、それをノンフィクションシナリオとして市民が声に出して読む、それが国会音読です。

質問する野党議員役、それに答える大臣役、指名する委員長役など、参加者はそれぞれその役になりきって、実際に国会で行われたやり取りを読んでいきます。

すると、次々見えてくる。あれ？ この大臣、質問にまったく答えてないよね。あ、そもそも大臣もよくわかってないんだ。関係ないことばかり言ってる。これ、全然コミュニケーションになってないよ。

読んだ後の感想もさまざまです。これ、本当に国会で起きてることなんだよね？ まるでコント

だ、おかしすぎる！ でも、こんなやり取りで法律が決まっちゃうって、どういうこと？ しかも全部、私たちの税金で！

実際に自分で音読してみることで、遠いと思っていた国会がにわかになんか身近になるみたい。政治を自分ごとにしていくのに、こんなに手軽で、いい方法があったんだ、と気づいた人たちの間で、ネットや口コミを通して、コッカイオンドクはごく短期間で全国にひろがっていきました。

オンドクが生まれたわけ

コッカイオンドクの生みの親は、30年来の友人の小原美由紀さん。彼女は以前から、SASPL（特定秘密保護法に反対する学生有志の会）やSEALDs（自由と民主主義のための学生緊急行動）の若者たちのスピーチ、おとしの安保国会における安倍首相と志位共産党委員長との討論など、一人でこつこつと書き起こしては、自分のフェイスブックに投稿

する、ということが続けてきた金沢のお母さんです。

共謀罪法案の審議がはじまった今年の春、美由紀さんはこの法案の国会やりとりを、さらにこまめにフェイスブックにアップしていきました。すべての国民に関係のあるとっても重要な法案にもかかわらず、審議の進み方が急すぎて、どんな内容なのか、どんな問題点があるのかほとんど知られないうちに法案が通ってしまいそうなことへの、強い危機感から。

いくつかの書き起こしをならべて、「国会答弁を改めて読み返し、怒りを新たにしましょう」とフェイスブックで呼びかけると、輪島の友人から即、これ、音読したい！と反応がありました。

そうか、一人で黙読よりも、仲間と音読、声に出してみたら、確におもしろいかも。そう思った美由紀さんが、知り合いの新聞記者さんにその思いつきを伝えてみたところ、ちょうどこの記者さん自身も、共謀罪に関心のない人になかなか情報が届かない、どうしたら伝わるだろう、と悩んでいたのだとか。絶対取材します！と、すぐに答应てくれたそうです。

そして記者さんとの電話を切るなり、彼女は私に電話をかけてきたのでした。「スウさん、こういうことしたいんだけど、いつなら空いてる？」

かくして、音読を思いついてから2日後の5月15日、本邦初のコックイオンドクが津幡の我が家で実施されたのでした。ごく小さな、だけど斬新なアイデアの市民アクションを取り上げ大きく紹介してくれたメディアと、さらにネットの力でひろがり、参議院での採決直前の日曜日、6月11日めがけて呼びかけた「全国一斉コックイオンドク！」では、22の都道府県、全国44カ所でこの音読会がくりひろげられました。

進化するコックイオンドク

はじめはただ言葉を読むだけだったのが、やが

て名札をつくったり、大臣役のお面をつけたり、頭にカツラを乗せたり、セリフはないけど、大臣が答えにつまった時に耳打ちする官僚役がマスク姿でスタンバイしたり、と、演出やら工夫の遊び心も加わってバージョンアップ。その音読風景がネットでもたまたま拡散され、お茶の間でも、路上でも、たった数人でも、始める人たちがふえていきました。

そこで音読されているのは、読み手自身の意見の主張ではありません。国会で実際に行われたやり取りです。足すことも引くこともせずに、ありのままの国会を切り取って、それを読んでみた人と聞いていた人がどう感じるのか、ということに尽きる。だからこそ、デモとか政治的なことはちょっと……とこれまで尻込みしてた人も、あ、これならやってみたいかも、と気軽に思えるようなハードルの低さだったのかもしれない。

国会答弁を仲間たちと音読してみることで、国会の中でいま何が起きているか、どんな人がどんな風に、私の未来を決めているのか——そう、政治っていう遠くに見えてた世界が、実はこんなにも自分と関係大ありだったんだと実感できる。これは、そんなすぐれた新しいツールだなと思います。

日本のあちこちで市民が国会を音読しているらしいということ、ついには当の国会でも言及されました！今まで、どうせ国民は国会なんて聞いていないよ、とたかをくくっていた大臣や議員たちも、ちゃんと聞かれてるなら言うことに責任持たなきゃまずいな……と思うようになってくれるかもしれません。というか、本当は国民がちゃんと見ている、ということこそがきっと、民主主義の前提なのですよ。

音読用の書き起こし原稿がアップされている「コックイオンドク！」のサイトでは、共謀罪法が通った後の現在も、自衛隊日報問題や加計学園問題についての国会質疑に加えて、その記者会見を書き起こした「カイケンオンドク」など、さら

に進化したものが、その都度更新されています。

<https://believe-j.jimdo.com>

ふだんの努力のひと

美由紀さんはこれまでも、自分のできるピースアクションをいろいろと考えついでには仲間呼びかけ、実行してきたお母さんです。17年続くピースワーク金沢の実行委員であり、街に出て、設問に対してシールを貼ってもらうことで賛否を問う、いくつものシール投票や、SEALDsの学生さんと呼んでの講演会など。私も声かけしてもらってはよく一緒に行動してきました。

このコッカイオンドクに関してほんとにすばらしいな、と思うのは、国会審議の中継を聞いてはそれを文字に書き起こすという、彼女の普段からの地道な作業の積みかさねが、多くの人の共感を呼んで、ムーブメントとして育っていったところ。彼女がまさに、金沢のピース仲間の合言葉でもある、不断の努力を日々普段から、の12条する人だなあ、って思うゆえんです。

コッカイオンドク！に関する美由紀さんへのインタビュー記事が、『望星』という雑誌の2017年9月号にくわしく載っています（発行：東海教育研究所、発売：東海大学出版部）。<http://www.tokaiedu.co.jp/bosei/>

平和のおはなし会

そのひとが普段からしていることに、実は平和につながる大きな意味がある、と私に感じさせてくれる、もう一人のひとのこと。

「紅茶の時間」のもっとも古くからの仲間の一人である細川律子さんは、1982年から自宅で「はまなす文庫」をひらいています。月に一度のおはなし会ももう30年余り。夏のおはなし会のテーマはいつも、平和。私は皆勤賞をもらえるほど、毎年参加しています。もちろん今年も。

律子さんがこの日用に何冊かの絵本を選んでく

れていて、やってきた人の顔を見ながら、〇〇さん、これ、読んでもらえる？ ◇◇ちゃん、これ、読んでみる？ と声かけをしていくうちに、平和のおはなし会の中味が決まっていきます。来た人全員が、何かを読む、語る、というライブワークショップのようなおはなし会。

手遊びと今月の詩にはじまる、その日のプログラムはこうでした。

- ・紙芝居『あおよ、かえってこい』（早乙女勝元作、童心社）
東京大空襲の日、かわいがって飼っていた馬のあおが、少年のいのちを救ってくれた物語。
- ・『まちんと』（松谷みよ子作、偕成社）
広島に原爆が落ちた日、もうちょっとトマトがほしいよう、といて死んでいった小さな女の子のお話。
- ・紙芝居『トビウオのぼうやはびょうきです』（いぬいとみこ作、童心社）
広島と長崎に原爆を落としてから約10年後、アメリカはビキニ環礁で水爆実験を。海に降ってきた白いもののせいで、魚たちは次々と病気になっていく。トビウオの坊やもだんだん具合がわるくなってきて――。
- ・『へいわってどんなこと？』（浜田桂子作、童心社）
この本は、浜田さんたち日本の絵本作家が中国と韓国に呼びかけ、3カ国12人の絵本作家たちの協力を実現した、平和を訴える絵本シリーズの中の一冊。
日常の当たり前にみえる一つひとつのこと、ごはながたべられること、ぐっすりねむれることが、実はとても貴重なことで、それこそが平和なんだと子どもたちに感じてもらうための、選びぬかれた言葉たち。そして、子どもたち自身が平和を享受する客体であると同時に実現する主体でもある、ということが「いやなことは

いやだって、ひとりでもいけんが出来る」、「ばくだんなんか おとさない」という言葉にあらわれている気がしました。

絵本の最後に出てきた言葉、「へいわって ぼくがうまれて よかったっていうこと」「きみがうまれて よかったっていうこと」「そしてね、きみとぼくはともだちになれるっていうこと」が、胸にしみました。

- ・『へいわってすてきだね』（ブロンズ新社）
与那国島の小学一年生、安里有生^{あきとゆうき}くんの詩に、長谷川義史さんが絵を描いて、一冊の絵本に。有生くんは、2013年の沖縄全戦没者慰霊の日に、この詩を朗読しました。「へいわってなにかな」と6歳の男の子が考えた平和は、浜田さんが書いた『へいわってどんなこと?』ともいっぱい重なっています。

- ・『土のふえ』（今西祐行作、岩崎書店）
隣りあわせで憎みあう二つの国の若者。兵士になった一人は羊飼、一人は牛飼。戦場の土でつくった笛を二人が吹くと、敵も味方もそれぞれのふるさとを懐かしんで、自分たちはいたい何のために戦わないといけないんだろう、と考え始めて、戦うことをやめるお話。

私はこの日、「けんぼう BOOK」の最後に書いた文章、「みるく世^よがやゆら」を、おはなし会にくるちいさなひとにもわかるよう短く書きなおしたて、読ませてもらいました。記録する意味で、ここに再録します。

みるく世がやゆら

無関心から「無」がとれるって、すごいことです。これ、なんだろう？ どうしてかな、すごいな、おもしろそう！ って、関心を持ち始めると、ひとは変わっていきます。変わんないひともいるよ、って言われそうだけでも、きっとそういうひとは本

当には、学んでいないのだ。

「学んだことのたった一つの証拠は、変わることに」。ずっと昔に聞いて、今も時々思い出す、教育哲学者の林竹二さんのこの言葉は、私の中の希望のともしびです。

この社会で起きているいろんなこと、何も知らないでいるほうが気楽だなあ、って思うこともなくはないけど、そんな時はいつもふしぎと「アンパンマン・マーチ」が胸の奥から響いてきます。

アンパンマンは尋ねます。君は何のために生まれてきたの？ 何をして生きるの？ 何が君のしあわせなの？ それに答えられないまま、それがわからないまま、終わるのはいやだ、というアンパンマン。

そうなんです。私は、何のために生まれてきた？ しあわせになるために生まれてきたのだから、そのしあわせが何なのか追い求めて生きていきたい。でもその時に、他のひとのしあわせに生きる権利をじゃましたり、取ったり、踏んづけたり、ってのは無しだよと、憲法13条に書いてあります。

私は「13条のうた」の中でこんな言葉を歌いました。♪「誰もが そう 誰もがしあわせになるために 生まれてきたんだ この星で 同じ時を生きる」

そう思っている、無関心のままでいると、そんなつもりなくても誰かを傷つけたり、誰かのよろこびを踏みにじったりしてしまう。沖縄にたくさんあるアメリカ軍の基地のことや、原発事故が起きた福島のこと、何も知らずにいることで、そこに暮らす人たちの痛みに、気づかない、気づけないことがいっぱいあると思います。

三上智恵さんという沖縄のテレビ局にいた方がつくった「標的の村」というドキュメンタリー映画を観ました。この映画を観てはじめて、ベトナム戦争の時、アメリカの兵隊たちの襲撃訓練のため、沖縄の高江というところに「ベトナム村」がつくられて、そこに暮らしていた人たちがベトナムの村人の役をさせられていた、と知りました。

なんてひどいことを！

その同じ高江地区に、これまで何度も墜落死亡事故を起こしている、オスプレイという危険なヘリコプターを着陸させるためのヘリパッドが今、建設されようとしています。建設に反対の声をあげる地区の人たちを、国はものすごく乱暴なやり方で抑え込んでいます。

海のもっともきれいな辺野古というところにも、国は新しい基地をつくっています。つらい戦争を体験した沖縄の人たちが、やめて！とどれだけ声をあげても、国はいっこうにその願いを聞こうとしません。

反対の座り込みをしているおばあに、ある若者がききました。座り込みをしたって結果は何も変わらないのに、どうしてあなたは座り込みをするのですか？ そのおばあはきっぱり答えたそうです。「戦争に反対した私という人間が存在したことは、歴史に残るよ」

こんなおばあ、おじいをはじめ、沖縄の人たちはこれまでずっと、他のどの県の人たちよりも真剣に国と向きあって、勇気をだして、おかしいことはおかしいと言い、いやなことはいやだと言い、いのちこそが宝だと言って、ずーっと不断の努力をし続けてきています。にもかかわらず、その人たちの、自由に生きる権利も、幸せを求める権利も、あまりに粗末にされているのです。

おととして70回目になる、沖縄戦で亡くなったすべての人を追悼する式で、高校3年性の知念まさる捷くんが、自分で作った平和の詩「みるく世がやゆら」を朗読しました。みるくゆがやゆらは、沖縄の島言葉で、「平和でしょうか」という意味だそうです。

彼が風に尋ねます。彼が彼に、そして私たちに、尋ねます。はたして今は、平和な世の中なのでしょうか、って。彼の問いかけにはっきりとこたえられない私は、知ることの、まだまだ道の途中にいます。でもせめて、学びながら、知ったことを伝えることで誰かに手渡していく、バトンタッチ

していく。そんなふう生きていく私でありたい、と思っています。

そんな私の遙かな道のどこか途中で、日差しの強くまぶしい道で、吹き飛ばされそうな嵐の中で、または互いにちょっと一休み中の木陰の下で、ひょいといつかあなたに出逢えるかも、しれませんね。その時は、はじめまして、という懐かしいあいさつを交わしましょう。合掌も、握手も、てのひら同士のハグであるように、あなたともハグのようなはじめての握手をして、また前に進んでいきましょう。今のいのちと、いのちの未来にとっての、少しでもよりよいみるく世を、一緒につくっていくために。

言葉にすること

おはなし会の最後はいつも、むかしばなしで終わります。この日もそうでした。手遊びと詩にはじまり、最後はろうそくに火をともししておはなしを聴く、これが30年余りも続いてきた、おはなし会のかたち。この日は全部あわせると1時間半近く、という長丁場のおはなし会になったけど、お母さんと来ていたちいさなひとたちはみな、文庫と親しい子たちのようで、すべてのプログラムに飽きることなく、集中して聞いていました。

おはなし会が終わってからのお茶の時間に、律子さんがなにげなく言ったこの言葉、しっかりと心に刻みます。

「誰もが好きなように集まれること、言いたいことを言えること、戦争はいやですって、言えること。それが平和だと思うのね、できない時代もかつてありましたもんね。この文庫も、平和だから続けてこれた。平和の象徴は、安心して、絵本を読んだりおはなしを聞いたりできること。こういう、いま当たり前に見えることも、こうしてちゃんと言葉にしておかないとね」

そうなんです、平和を言葉にする、意識して口

に出す、ということ。おとなの律子さんが、沖縄の6歳の有生くんが、絵本作家の浜田さんが、三者三様に、それぞれに言葉にした「平和」。気づいた人が言葉にすることで、それを聞いて、ああ、当たり前って思っていたけど、これが平和だ、これも、あれも、そうかもしれない、という認識が、あとからついてくる。

また、こうも思います。誰かに向けて言葉にしているようでいて、実は、自分の放った言葉を聞く自分もそこにいる、ということ。私も、言葉にすることで、あ、私こう思っているんだ、こんな風に平和を感じているんだ、と発見する。それは自覚であり、決意でもある気がします。だから、私は言葉に出していく自分でありたいのです。書くことでも、語ることでも。そうすることによって、まだ手にすることのできてない平和や、手放しそうになっている平和を考えられるかもしれない、と思うから。

平和の協働作業

中国と韓国の作家たちと、あわせて12冊の平和の絵本をつくっているという浜田桂子さんのことを知りたくて、家に戻ってから調べていたら、こんなインタビュー記事を見つけました。

「絵本ナビ 浜田桂子さん『へいわってどんなこと?』平和を訴える絵本シリーズインタビュー」<http://www.ehonnabi.net/specialcontents/interview/20110525/>

国と国とはむずかしくても、個人と個人が誠意を尽くして何年もかけて、平和のための協働作業を重ねていった過程が語られています。この絵本の最後にでてきた「へいわって ぼくがうまれて よかったっていうこと」「きみがうまれて よかったっていうこと」「そしてね、きみとぼくはともだちになれるっていうこと」これが、やはり一番の平和だと、浜田さん。さらに浜田さんのこの言葉にも、深く共感しました。

——『へいわってどんなこと?』はいつも自分に突きつけていた問いなんです。平和とは“戦争してない状態”だけではないという思いがずっとあって。戦争してないから平和だろうか、と考えると、そう言い切れない。じゃ何だろうと考えたとき、「いのち」だと。「いのち」が大切にされていなければ、平和って言えないんじゃないか。それは「産むこと」「生まれること」やいのちあるがままの子どもの姿を描こうとした私の絵本のベースとまったく同じだな、と思ったんです。

2017.8.25

